

ひまわり メッセージ

14号

2012. 5. 8

西濃園域
際達障が、使機
センター ひまわり

発行人：中野にみ子

白色で描く 心模様



久しぶりに二歳四ヶ月の孫と絵を描いて遊びました。仮死で生まれた彼は、視神経の弱さもあって二歳近くまで独歩できませんでした。色も自ら選ぶことをせず、私の手渡すペンでぐるぐる丸を楽しんでいました。

その孫の姿を見ながら、遠い昔の成人施設でのできごとを思い出しました。

三十代のKさんは、自由時間にはいつも長靴をはき、スコップを持って、あちこちの溝の土を掘って過す人でした。ことは話さないし、目も合わせないKさんがどんな思いで生活しているのか知る術はありませんでしたが、唯一特徴的だったのは描画でした。Kさんの絵は白の画用紙に白のクレパスでぐるぐる丸を描くのです。若かった私に

は、それはKさんの心の投影に思われました。

指導員として彼に必要な指導が何なのか、わからないままに一緒にスコップを持って行動することにしました。

スコップを持ってあちこちするKさんについていくと、彼は拒むかのように私から離れていってしまいます。「待つて……」「一緒にやろう」という状態がどの位続いたでしょうか。数ヶ月経った頃、彼は白の画用紙に、はじめて肌色でぐるぐる丸を描きました。そして、チラッと一瞥をくれたのでした。

彼はその後まもなくなくなり、もっと広がる色の世界を見せてくれることはありませんでしたが、私はその一瞬にKさんの心の変化を感じたのでした。若き日の私の錯覚であったのかもしれませんが、あの時、Kさんの心の中に何らかの変化があったのだと信じたのです。

もしも今のうちに、幼い頃からのスマイルブックのようなものがあれば、Kさんへの関わりはもっと違っていたかもしれません。スコップを下げて前屈みに歩いていたKさんの姿を思いながら、今よりもっと相手を理解しようと思っ、ていた遠い日の自分の原点に立ち還ろうと思っただのです。

過去と今と未来と……

乳児期の気づき



「幼稚園は教育だけど保育園は保育でしょ？ おもりにしてただけだよね……。エッ？ だから何でしょう？ 教育をしてる幼稚園は、保育園より上で、そこに働く資格もよって言いたい……。？」

冗談じゃありません。人間の赤ちゃんが未成熟なまま生まれてきて、人間としての二足歩行と言語を獲得していくまでの乳児期を大切に育て、一人ひとりの子どもの発達をしっかりと受け止めて育てていく視点がなければ、その土台をしっかりとしたものにして、なかつたら困るのは子どもたちだということも、あなたには分かってるのですか？ 「保育園はおもりでしょ」ということはの中に含まれた狭みのことばに、私は驚きを禁じえませんでした。

乳児の発達を知らないで三歳の保育はないでしょうし、

三歳の発達を知らずに五歳の教育はないのです。一人の子ども、一人の人間が生まれ、育っていく過程を知った上での保育、教育を私たちは考えてこなかったのではないのでしょうか。ただ「今」だけを見て、その子が今まで育ってきたことも、今後の育ちも、すべてその子の人生の一本の中に在るものなのに、今しか無いがごとくに過ごしてはこなかったでしょうか？

「おもりにしてただけだから……」と乳児期の大事な発達を見ようとしなない人の目には、おとなしくて育てやすい子の発達の課題も、人見知りしない子、はじめの場所や物に、まるで場所見知り、モノ見知りのような状態が見られる子の発達の課題も見えないのではないのでしょうか。そして、そういう人にかぎって、「あの子は自閉症だから……」とか「ADHDだから……」と一般的障がい特性をたてにして、自分の行動を正当化していかれるのでしょうか。

私は最近、乳児期の子どもの発達が本当に大事にされないといけないと思っています。今まで、子どもたち自らが育んできたと思ってきたことが、実はそうではなく、子どもの内からの要求に応えてくれる大人がいてはじめて成り立って

たということも思い知らされていきます。

おとなしくて育てやすかったという乳児期は、実は「人を求めてやまない力」が不足していたと考えられるのです。あやされて笑う、不快だった泣くという交流の中で、赤ちゃんは自分をどの様に受け止めてくれる相手なのかを認識していきます。そして、赤ちゃんと自分が相手に笑いかけていき、見比べながら、パパとママを選んだり、違いをわかっています。そして愛着の対象をつくっていきます。

自閉症のお子さんには人見知りがないと言われます。外界から自分を守ってくれる愛着の対象が作りにくいからだろうと考えられています。愛着対象のある赤ちゃんは、その人に抱かれて泣きながらもさつと見て、相手とその人との交流を見比べながら、「怖い、でも大丈夫かな……」という心の揺れを体験していきます。違いを知って怖さや不安をもちつつも心理的な支えとなる人の存在がそれを乗りこえる力になっていくわけです。

人見知りはないけれど新しい場所や新しい物ほとても苦手で泣き叫ぶというお子さんの場合、違いはわかるけれど、それに対する不安を乗りこえていくための心理的な

支えとなる人がいないのです。だから不安や恐怖が持続してしまふのです。

愛着の対象は多くはお母さんですが、園では、担任の先生ということになりますね。

生後十ヶ月頃から出てくる「指さし」も自閉症のお子さんには見られないと言われます。特に「ホラ、見つけたよ、見て……」というように相手に共感を求める叙述の指さしや、ママが「ホラ、ワンワだよ」と言っていて指さした時に同じ方を見る共同注意といったことが遅れることがわかっています。人さし指は、外界の対象をとりにこんでいくための大切な指だと言われます。何かを見つけたら「ソニック」と、つついてみるのも人さし指ですね。

以前、ある療育機関で指さし指導なるものを実践されたことがありましたが、形だけ教えても意味はありません。「おや、何だろう？」という興味と、それを受け止めてくれる人がいることが大事なのです。

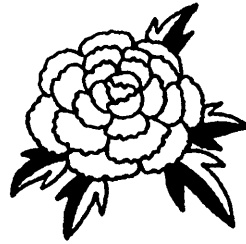
こうした乳児期に見られる情動の交流の少なさに私たちが気づいて意図的にかかわっていくかどうかが、とても重要なことですね。でも核家族になり、若いお母さん

一人に子育てをまかせるというのでは、若いママたちは困ってしまうでしょう。お母さんたちを支える人が必要な時代なのです。先輩のお母さんの手助けもしてあげられるといいですね。

現代は子育てに悩むお母さんは増え続けているようです。乳児期からの信頼できる大人との共有・共感の関係を充実させてあげることが、どのお子さんにとっても大切なことです。

NHKの

特集番組を見て



先日、NHKで「現代うつ病」についての特集が組まれていました。昔のうつ病は、とても生真面目で自分を追いつめていってしまうタイプが殆んどだったのに対して現代のうつ病は、上司から注意されただけで仕事に行けなくなり、うつ病の診断が出されて、会社を休んでいる間にショッピングや海外旅行などに出かけて楽しむことができるといいます。わがまままで自分勝手に見えるこ

れりの新入社員は「ゆとり教育」で育った世代ですが、実はどの職場にも多数見られるようです。

あるIT企業では、社員を自衛隊に派遣しているというところで、整列や行進をやっていました。その若い人たちの姿を見て驚きました。背筋を伸ばして立っていることができない人、行進のとき手足が協調して動かせず右手と右足が同時に出る人、「回れ右」ができずにバランスをくずす人……など姿勢のくずれが目立つのです。IT企業にお勤めなのですから、パソコンも使いこなせるでしょうし、学校の勉強はできた方々なのでしょうが、家庭ではどんな生活をしてきたのでしょうか？

新入社員の欠席の連絡も母親が多いようで、その姿からは、いつまでたっても母子依存から抜けられない、幼児性が見え隠れします。家庭では、とても良い子で、親から叱られたり禁止されたりすることもなく、全て受容されて育ってきたケースが多いといわれます。そして「自分は一生けん命やっている」「自分は悪くない。相手が悪いのだ」と考えているということです。自己肯定感がどこかでまちがってしまったのでしょうか……。

この番組を見ながら、発達障がいの子どもたちのことを考えていました。

相談に来所されるお母さんの中には、子どもが出し散らかした玩具を、自分で全部片づけられる方もあります。なかなか帰ろうとしない子にとことんつき合おうとされる方もあります。「学校の先生に理解がなくて……」とおっしゃる方もあります。

そういう母と子のかかわりを見ながら、実は、大丈夫かなあ……と心配になることも少なくありません。全てが子ども中心で、何でも子どもの言う成りと感じられる母子の場合、幼児期ならともかく小学生になってもこのままでは……と思うからです。そして一番心配なのは、「家の子は発達障がいなのだから、相手がもっと理解すべきなのに……」と発言される場合です。

自閉症スペクトラムとか、アスペルガー障がいとか、ADHDだとか診断されたことは確かにその子の一側面にちがいはありません。そしてその障がい特性もうち合わせていると思います。けれども、子どもは発達しつづけていくのです。いつまでも同じではありません。教育によって

も、家庭の持ち方によっても大きく変わっていくのです。

子どもは、様々な矛盾や葛藤を抱えつつ成長していくものです。子どもの好きなことだけをやらせていることが子どもの幸せではないと思うのです。目の前のことをやってみようかな……と思うことも一歩前進でしょうしそれが達成できた時に共に喜ぶことも、できなかった時の悔しさを共感することも大事です。

最近のお母さんたちはとても勉強熱心です。発達障がいの特性についてもよく知っておられます。自分の子どもの特性や苦手なところも、私以上にご存知かもしれません。「私がしっかりしなくちゃ……」と、一層熱心になられるのわかります。ですから保育園や学校に対しても「うちの子には、こういう支援が必要です」「そういうことはでは、うちの子にはわかりません」とおっしゃることも多いと思います。学校側も特別支援教育の立場から、保護者の方と話し合いをもたれるところも増えてきました。

しかし……です。家庭ではどうですか？何でもやってあげていませんか？家庭で彼の役割はありますか？

学校だけに要求していませんか？

そして、「そんなことは家の子には無理です。」「できるはずがありません。」「と、年令を重ねて自立への道へと学校側からの申し入れに「NO.」と言っではいけないでしょうか？

思春期は、子どもが親から少しづつ自立していく時です。今までも少しづつ見守りに転じてきているでしょうが、お母さん自身が相互依存になっっていないか、自分をふり返ってみることも大切だと思っております。

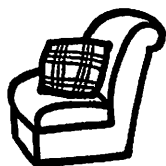
何でもお母さんに聞かないと決められない子、イエスカノーか、二者選択しかしてこなかった子、ことばでうまく伝えられないからカードから選ぶように学習をしてきた子、視覚支援を常にしてきた子、……子どもの発達のある時期には、とても必要だったけれども、もしかしたら今は必要ではない支援もあるかもしれないと考えることも必要であると私は思っています。

「将来のことなど考えられません」とおっしゃるかもしれません。子どもたちはお母さんが考えられているか

るよりはるかに発達していつています。いつまでもお母さんが指示しないと出来ないというのでは困ります。自分で考えて、自分で選んで行動していつてくれないと困ります。

自分が考えていること、望んでいることと現実とのずれを知っていくことも、自立に向けて必要なことです。自分で折り合いをつけていく力も必要です。幼い頃のうちに「うすれはいいよ。」「うと言えはいいよ。」と教えてもらうだけでなく、経験を積む中で自らが求め、考えていけるようになってほしいと思っております。子どもたちが重ねてきた年令も大切に考えていきましょう。

お知らせ



次回の親の会は 六月十二日

九時三十分〜十二時までです。

五月の例会では「家庭でできること」がテーマでした。